けやき通信

2013年3月 No. 237

―錦織佳代子―

Spring has come.

一気に春が来ました。

菜の花、水仙、パンジー、桜草
土手の桜並木も満開。
あら、庭の白いライラックまで
三月のうちに花開くなんて、
モッコウバラも
今にも咲きそう。
どんなに寒くても
春は必ずくる！

読書ノート

- **小さき者へ　生まれ出ずる悩み**　有島武郎著　岩波文庫

北海道岩内の漁夫であった木田金次郎をモデルに「生まれ出ずる悩み」が書かれたことを知り、のち画家としての人生を生ききった金次郎を知りたいと思って手にした。まず「小さき者へ」を読みながら激しく胸を打たれる。そして、北の荒海で常に死と直面しながら漁夫たちが闘うシーンの描写、金次郎が有島と出会って、ついには画家として生きる姿に衝撃を覚える。有島自身の生き方にも思わず"ひざ"を正す。かつてこういう日本人がいたのだ。

- **一房の葡萄**　有島武郎著　角川文庫

表紙を開くと有島と三人の子息の和服姿の写真がある。父も子もなんと端正で気品のある顔だち。幼子はそれぞれ4歳、5歳、6歳のとき母を結核で失った。8篇の童話が収められている。標題の「一房の葡萄」は何度か読み返した。子どもを教え育てるということは、こういうことなのだとハッとさせられる。誤ちを犯しても声を荒げる必要はなくまして体罰などではない。人間としての善意や審美眼はどのようにして身につくのか、それがどんなに大切なことかに…。

- **「生まれ出ずる悩み」と私**　木田金次郎著　北海道新聞社

小説のモデル自身のエッセイと素描画もふんだんに収められている。金次郎と有島の出会いによって、お互いに素晴しい作品を世に遺してくれた。二人とも劇的な人生で、私は強く引かれている。

進学、就職、復職、新しい仕事にと一歩を踏みだした若い人たちが身近にもいて、どうぞ強く生きてと願います。そして何より毎日の「食べること」を大事にしてね。

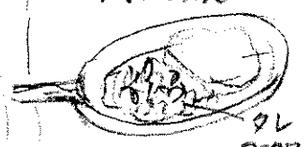
卵の甘辛焼き

まあかんたん！おいしい。
お弁当にも、ごはんのおかずに。

卵6コ 溶きほぐし、塩少々をふる。
フライパンにサラダ油大さじ1を熱して
卵を入れ、混ぜながら半熟状態に
なったら二つに折る。まわりにタレをかけて
両面焼く。

タレ { しょうゆ 大さじ2
みりん、さとう 各大さじ1

まずは半量で作ってみて下さい。
しょうゆ色の卵焼き。



津波の被害の大きかった塩釜を通って松島へ

〈松島〉名前のとおり松の美しい島々。
大地震のこともすべて包み込んだおだやかさ。
空港で石巻の人たちが立ち上がって作っている「金華サバ」のくんせいを買った。深い味わい…。

3/24~26　雪の札幌からカタリくん遊びに来てくれて
たのしい2日間

GORIさんの後輩の息子がきてくれました。「かよさんすごい、おいしい！」と手作り料理をよろんでくれてうれしい～。

3/28~30　**仙台への旅**

マヤの招待でGORIさんと2泊の旅

〈せんだいメディアテーク〉けやきの巨樹が続く定禅寺通りライブラリー、ギャラリー、スタジオ、カフェなど充実した設備で文化創造活動の場。利用者も多い。この建築を見たいと願っていた夢かなう。